

《研究ノート》

優陀那和上の唱題観と現代

三 原 正 資

(現代宗教研究所嘱託)

一

優陀那和上の教学は、これまでに種々に論評されているが、宗祖の教学を知ろうとする場合の一つのすぐれた指標であろう。これを譬えて言うに、宗祖の姿を和上というレンズを通して見て、その像の変化を知ることによって、かえって宗祖の教学の特質を知ることができるのである。

徳川時代後期の思想の潜在的近代性は、すでに指摘されている。例えば、源了圓氏は、「儒教合理主義の知的洗礼を受けた日本人は、もはや迷信も中世的世界観も信じなかった」(『徳川思想小史』中公新書)と述べているが、和上の著作を読むとき、このような近代的思维の影響を見出すことができる。一例を挙げると、最初和上は、仏教の三世観を信じていなかったと述べている(『最実事論』)。また、和上の著作全般を通じて、我々は実に緻密な思考に接することができる。このような点において、和上の思考は、宗祖の時代とは隔たり、現代に近いのである。

宗祖によって創唱された唱題という宗教的実践は、その方法が簡潔であるために、実は多くの問題を我々になげかけている。この唱題について、優陀那和上は、どのように考察されているのであろうか。

和上は唱題の実践について、

事観修行ノ法ハ、内心ニ事ノ一念三千法界唯身ノ妙解ヲ存シテ、外二十界具足ノ大曼荼羅ニ対シ、心心相次念念相續シテ妙題ノ五字七字ヲ持念唱呼スルヲ行相トスルナリ。(『双照事観修相篇』四一九一頁)

後五百歳宗門草創ノ時ハ……口業唱題ヲ先トスルナリ。今時王法隆盛文華興茂ノ時ニ至テハ……意業最モ精進スベシ。(右同 四一九三―一九四頁)

無解但信ヲ貴ンテ未来成仏ノミニ安心シテハ、実教最上乘ヲ受持スル甲斐ナク王化隆盛ノ世代ニ生タル甲斐ナシ。

(『妙宗本尊略弁』三二四〇四頁)

と述べ、その時機観いわゆる時代観・人間観によつて、身・口・意三業の中でも意業を重視するところが、和上の唱題観の特色である。^{註二}

和上はまた、

即身成仏ヲ信シテ疑フコトコレ無キハ、解了ト何ノ異アラシヤ。(『妙宗本尊略弁』三二四〇六頁)

信モ亦意業ナルノミ。(『教観進退略抄』四一三四二頁)

と述べ、信心を意業であると考察したのであるが、このような信心は、但信口唱という場合の「信」とはやや内容を異にし、「解」を内包しているのではなからうか。

こうして和上は、

寂光成仏はただ信心決定にあり。信心だに一心にしてくるふ事なくんば成仏うたがひあるべからず。その上は随分題目をとなへて寂光の都にいたる家苞みやくけとすべし。その余の善根はつとむればいよいよ良し。(『仏界一覽抄』五十八

若シ夫レ散心雜慮百千声ヲ発スルハ、専心信敬十数声ヲ念ズルニ如カザル也。(『弘経要義』三十一七頁)
 と述べ、唱題の實踐において、口唱とやらんで信心を重視したのである。^{註三}

その上で、

今觀心ノ法門ヲ專ニスベシト云フハ、出家在家ノ善根ヲ増長シ、國家ノ良風俗ヲ助ケンカ為ナリ。……諸業ヲ以テ仏道ヲ修治スベシ。(『教觀進退略鈔』四一三四一〜三四二頁)

と言ひ、妙解信心に立脚して、更に積極的な社会活動を展開することを勧めたのである。要するに、唱題の實踐が實際の社会生活の中にかなる結果をもたらすべきであるかという点に、和上は心を用いたのである。

三

このような和上の唱題觀は、現代の我々の信行の基本となつていふところであるが、顧みられるべき点も二、三あると思う。

第一に、和上は口業唱題の意義について、

但信口唱不解不了ニシテ任運ニ円理ニ応ズ……最深秘妙ノ要行也。(『弘経要義』三十一六頁)

と述べているが、しかし、「然ルニ設教ノ本意ハ正ク慧業ニ在リ」(右同 三十一六頁)とするのであるから、その意業重視の唱題においては、口唱の輕視を招きやすいのではなからうか。

和上は、念仏について、「智ヲ去ツテ愚ニ就ク」(『祖書綱要正議』三十一二四六頁)ものであると評しているが、この批判は我宗の口業唱題にも及ぶのではなからうか。すなわち、現代では、口唱への疑念と批判は常に潜在していると思ふのである。

この批判は宗祖の時代からあり、それに答えて宗祖は多くの題目論をのこされている。例えば『法華題目鈔』に、今の代の世間の学者の云く、只信心計りにて解心なく南無妙法蓮華經と唱ふる計りにて争か悪趣をまぬかるべき等云云。(昭和定本遺文三九二〜三九三頁)

と記されているのである。

唱題という宗教的实践は、殊に現代の合理的思考の上では問題を持たれるものであろうが、和上の唱題観は、意業を重視することによって、このような問題に対応したものとみなせるのである。^{註四}

現代において、この問題に関して注目されるべきものは、戸頃重基氏の唱題批判とそれに対する藤井日達師の反論(『三大秘法問答抄』、『大法輪』昭和四十六年十一月号所収)である。まず、戸頃氏の唱題批判の一節を挙げる。

日蓮宗の教学や修行では、「有智無智を嫌はず、一同に他事を捨てて、南無妙法蓮華經と唱ふべし」と云う信心易行主義が多くの日蓮門下の心情を支配したため、「心に存すべき事は一念三千」の実がなく、唱題は念仏と同様、口業の偏重に終って、その上、呪術的な口唱形式に転落してしまった。そこには哲学もなければ、倫理もなく、「名詮自性」とは云つても、詮顕さるべき何らの自性もない有様である。^{註五}

この批判に対して、藤井師は、

日蓮大聖人の宗教とは何ぞや……ただ事行の南無妙法蓮華經である。事行の南無妙法蓮華經とは、ただ余念なく南無妙法蓮華經と、声も惜しまず唱うる事である。一閻浮提の人毎に有智無智を嫌わず、一同に他事を捨てて、南無妙法蓮華經と唱うるところに、末法悪世救済の日本仏教の面目がある。

と述べ、口業正意の但唱題目論を展開したのである。

和上は、

宗義微ロフ故ニ題目ノ深極ヲ了セズ。然リ而シテ正行斯ニ傾ク。(『祖書綱要正義』三二四七頁)

と述べている。宗風の発展のために、現代においても、唱題の意義の一層の解明がのぞまれるのである。

第二に、和上の意業重視の唱題観の背景に楽観的、肯定的な人間観・時代観があることについては、すでに触れたのであるが、これはまた、鎌倉仏教の根底にあつた末法思想と、この時代の宗教者の関わりの問題でもあろう。和上は、

宗祖大士五濁ノ世、逆謗ノ機ニ対シテ専ラ本門ノ妙旨ヲ示シ玉フハ、造悪ヲ制止スルコト能ハザル機類ナルガ故ニ、煩惱即法界・結業即真如ナル旨ヲ説キ玉フナリ。……当今法華ヲ持ツ男女ニ左様ナ化導ハ無益ノ論ナリ。(『最実事論』四―二九七頁)

と述べ、末法意識の下に成立した宗祖の教学とは、傾向を異にするのである。

宗祖は、

わが智慧なにかせん……すりはむどく(須梨梨特)は三箇年に十四字を暗にせざりしかども、仏に成りぬ。提婆は六万蔵を暗にして無間に堕ちぬ。是偏に末代の今の世を表する也。(『三三蔵祈雨事』昭和定本遺文一〇六五―一〇七一頁)

今の人人善根を修すれば、いよいよ代のほろぶる事出来せり。(『智慧亡国御書』昭和定本遺文一一二九頁)

当世ノ学者此釈ヲ見ズシテ、末代ノ愚人ヲ以テ南岳天台ノ二聖ニ同ズ、悞ノ中ノ誤也。(『四信五品鈔』昭和定本遺文二二九七頁)

などと述べられて、時代と人間の本质に対して、深く厳しい宗教的認識を示されている。いつの時代であれ、唱題という宗教的実践の成立は、信仰者のこのような認識を俟つものではなかるうか。

和上は、「天下安泰ナルハ全ク武徳ニヨレリ」(『庚戌雜答』四―三七二頁)との時代認識を示したが、幕藩体制の崩壊は間近に迫っていたのである。これは、同時代を見通すということが、いかに困難なことであるかを我々に示して余

りあるではないか。むしろ、宗教はその時代の在り方と深く関わり、影響されて成立していることを知ることができるのである。このことは、和上以後の近代百年の宗教状況を見ると、その印象をより濃くする。宗教が常に時代と関わっている以上、時代の展開とその影響から全く自由であることはできないだろう。しかし一分の自由を保持できない者は、宗教者の名に値いしないであろうことも確かなことである。宗教が時代に対応するということは、実にむずかしいことなのであると思わざるをえない。

第三に、和上の意業重視ということは、当時の教団人の在り方に対する反省から生じてきたことであり、これも見過せない点であろう。

禅徒ハ教ヲ尋ネズ、唯ダ修行ヲ専ニス、立教ノ本意ニ契ヘリ、但ダ教相ヲ弁ゼザルヲ失トス。台徒ハ教觀ヲ兼尋ストイヘドモ、多クハ教句ニ年月ヲ費シ修觀ヲ怠廢ス、台祖ノ本意ヲ失フト云フベシ。本宗ノ学者日々ニ教相ヲ論ジテ修行ヲ進メズ、マタ仏祖ノ本意ニ契ハズト云フベシ。諍論に日ヲ費スノ失ナリ。タトヒ事相ノ行ヲ増進ストモ、理解明カナラザル時ハ法華ニ依ルノ功アラハレズ。口修身業ハ少クトモ円解明了ナル時ハ、修行ノ功德十倍シ利益顕然ナリ。願ハ急ニ觀解ヲ明カニスベシ。(『教觀進退略鈔』四―三三九頁)

と、和上は指摘しているのである。

しかし、教相を重んじない場合には、「我が宗最モ勝レタリ」(『学仏具眼抄』四―三五六頁)としつつも、結局は、「真言ノ即身成仏モ、禅宗ノ見性成仏モ、我が宗ノ觀心本尊モ、皆自身是仏ノ直道ニ入ラシムル本意ハコレ同ジ」(右同)となり、唱題は共通した宗教的目的を達成するための、宗教的実践の一方法にとどまってしまうのであろう。近代から現代にいたる宗教の状況では、その可能性が多いのではなからうか。現代においては、宗教の共存を認めることは常識になっているからである。

これに対して宗祖は、

門はことなりといへども入理一にして、皆仏意に叶ひ謗法とならずといはば、謗法という事あるべからざるか。
(『頭謗法抄』昭和定本遺文二六六頁)

という、教相を重んじる、いわゆる権実判を立教の根本精神としていのである。

この辺りにも、世界における諸宗教の将来を見すえて、唱題というものをどういうものとしてとらえていくべきかの現代的課題があるのではなからうか。^{註六}

四

近代合理主義を原理とする文明が展開している現代において、宗教のおかれていた状況はいかなるものであろうか。人は合理的なものを重んじる反面、非合理的なものにも強い関心をいだき、それが新宗教、あるいは新新宗教といわれるものの基盤を形成している。近代文明だけでは生きていけないと考え、しかし前近代へ逆行することもできないのである。また合理主義文明によって一旦否定されたものが、新しい可能性を示そうともしている。

和上の唱題観及びその教学は、近代日蓮宗の伝統となつて今日に及んでいるが、こうした流動的な状況の中で、あらためて日蓮聖人の宗教を多面的に見るべき時が来ていると思ふのである。

註一 司馬遼太郎氏は、「日本の『近代』」(『文芸春秋』第六十四卷第十号)で、江戸期にみられる近代精神について、次のように述べている。「ヨーロッパにおける近代精神を箇条書きにすれば、一つは宗教的権威の否定だろう。そのことは右の仲基にみられる。第二に科学的合理主義と人格の自律性だが、そのことは右の蟠桃と梅園が代表している。第三に人間主義があげられるが、これは井原西鶴が代表するといつていい」(七八頁)。

殊に蟠桃については、次のように指摘する。「その著『夢の代』ではいつさいの神秘主義を押し、鬼神は存在しないとす無鬼

論を展開した。仲基の論とはちがい、蟠桃の論をおしすすめると、神仏は否定されてしまう」(右同)。
優陀那教学は、このような思潮との交流の中で形成されたと考える。

註二

現代の唱題観を一瞥すると、三業受持を原則として、口唱に対して身業・意業を重視している。

日蓮大聖人の示された私達衆生の修行のあり方は、『報恩鈔』に、「有智無智をきらわず一同に他事を捨てて南無妙法蓮華經と唱うべし」と仰せられたように、唱題成仏と説かれてあります。強いていえば口業の唱題にあるように受取られますが、身業意業を離れての口業だけでは成り立ちません。身口意の三業具足して南無妙法蓮華經を唱題受持するところに唱題成仏のご真意があるのであります。(昭和四十九年日蓮宗宗務院発行『護法統一信行資料』二十一頁)

お題目は身と口と意(心)の三つが一体となつて唱えることが肝要です。口先ばかり、形ばかりではお題目を唱えたことにはなりません。声も惜しまず口で唱えるお題目、一心に法華經を信じ無二の志をささげて唱えるお題目、法華經に説かれたように生き法華經の教えを身に読んで唱えるお題目の三つがあわさつて、はじめてお題目を唱えたことになるのです。(昭和六十一年日蓮宗宗務院『お題目総弘通運動』十五頁)

しかし次に示すように、口唱の意義への着目と関心がないわけではない。

唱題をする時は仏様と一体になった自分であり……一打の響き、一呼の音声も一天四海に遍満しているのです。ただ凡眼凡耳が及ばないだけのこと、現代の科学はすでにその一部を証明していると思います。私達は大きな確信を以つて唱題一遍の仏光はわが身から出て一天四海を光被し、その行業は三世を貫いて止まぬものとして修行に励むべきであると思います。(前掲『護法統一信行資料』七頁)

口で唱えることに対して抵抗を示す人がありますが、それは口で唱えることの深い意義が理解されていないからです。……(ジエイムズの学説)を援用して説明するならば、口業唱題によつて信という精神的感動(法悦)は昂められ、五字七字への信念が決定してゆくのであります。(同二十八頁)

註三

ここで参考までに、一遍上人の名号論をみておきたい。

決定往生の信たらずとて、人ごとに嘆くいはれなき事なり。凡夫のころには決定なし。決定は名号なり。しかれば決定往生の信たらずとも、口にまかせて称せば往生すべし。是故に往生は心によらず、名号によりて往生するなり。決定の信をたてて往生すべしといはば、猶信心にかへるなり。わがころを打すて一向に名号によりて往生すと意得れば、をのづから又決定の心はおこるなり。

この法語について、金井清光氏は次のように解説する。

「この法語は「信」を否定している。ということは「信」を往生の正因となした親鸞の教えを真正面から否定したことになる。いくら信じなさい信じなさいと言われても、なかなか信じられないのが凡夫の実情である。……一遍は信心を否定した。凡夫の心に決定往生の信などあるはずがない。決定往生は名号である。だから口から出まかせの念仏が往生である。往生は信心によらず、名号による。……念仏の解釈の仕方によつて往生が決定するのではなく、念仏それ自体で往生するのだから、解釈などどうでもよい。念仏を唱えて往生しないと心で思つていても、唱えれば往生する」(金井清光「一遍上人の法語を読む」『大法輪』第五十三卷第八号総収に依る)。

単純な比較は無理であろうが、唱題観を考察する上で参考になると思う。

優陀那和上の信心正因論は、論理的には一遍上人の名号論とは対照的なものであろうし、ここで比較されている真宗教学にしても、その江戸期の展開をみると、実に多様であることがわかる。例えば、三業帰命説を異端とした三業惑乱の問題などは、本宗の三業受持論を考える上で興味深いものである。

註四

玉城康四郎『仏教の根底にあるもの』(講談社学術文庫)、河合隼雄『宗教と科学の接点』(岩波書店)、この二冊に感銘を受けた。二人の著者がこれまでの常識では非学問的領域といわれていた分野——死と死後生の問題、ニューサイエンスによる新しい世界観と仏教の世界観など——にまで考察を拡大しているからである。

これまでは宗教の合理的解釈のみが先行し、非合理と判断した部分を切りすていたと思われるが、実は理解をこえる部分こそ、これからの時代の中で大きな意味をもつてくるのではなからうか。この意味でも徳川後期の仏教批判、そして明治以来の人文科学の導入で大きな混乱におちいった仏教界は、厳しい反省のもと新しい成果を継承しつつ伝統教学を再確認し、新しいワク

組みの中で生かしていくことを試みていくべきであろう。

註五

戸頃氏は、道元禪師三十二才の時の著述である『正法眼藏弁道話』の一節、「誦経、念仏等のつとめにうるところの功德を、なぐちしるやいなや。ただしたをうごかし、こゑをあぐるを仏事功德とおもへるいはかなし。……口声をひまなくせる、春の田のかへるの昼夜になくがごとし、つひに又益なし」を引用して口唱批判の先例としているが、玉城康四郎氏は、禪師四十五歳の時になった『発無上心』の一節、「菩提心を拈来するといふは……誦経念仏するなり……一称南無仏するなり」を挙げて、次のように述べている。「わたしの見方からいえば、「弁道話」に説示されている道元の世界観も、人生の年輪を経れば、やがてこのような宗教的立場へ移ることは十分考えられ得るということに附け加えておきたい。」（『仏教の根底にあるもの』一八七頁）

又、玉城氏は只管打坐について、「道元にとっては、おそらく只管打坐が仏道の根本であり、他のすべての道はこの点に集約されてくることに変わりはないであろうが、しかし只管打坐がそのような根源の意味を持つほど、しかもそれが単純であればあるだけ、それはほとんど無に近いものであり、したがってそこに徹することによって、そこから展開する道はむしろ無数といつてよいであろう。」（同一八六〜七頁）と述べているが、これによれば、口唱と打坐の宗教的本質はむしろ相似しているのであつて、しばしばなされるように世間的常識的に両者の優劣を判断するのは、かえつて不当であろう。

註六

玉城氏前掲書所収の「仏教の未来」は味読すべき論稿である。裁判についての一節を次にかかげておく。

「浄土的なものも禅的なものも、あるいはその他の大乘的なもの本質が、すでにブツダの原始經典のなかに包摂されてあることが明瞭になつてきた。そのゆえに原始經典から大乘諸經典への思潮が、仏教の幹線であり原型である。この原型の意味を看取し体得することが、今日の仏教者に負わされた根本課題である、と私は思う。すでに天台・華嚴・禪・浄土・真言の各学派・宗派から、それぞれの立場において仏教全体を展望した教相判釈が試みられてきた。そしてそれは、親鸞・日蓮の教判をもつてストップしてしまつてゐる。未来の新教相判釈は、これまでのような特定の經典にもとづくのではなく、かかる幹線・原型の看取・体得から生れ出るであろうことを確信する。」（同二七九〜二八〇頁）

この考え方に近いものを宗祖にみると、「仏意」がそれに該当するのではなからうか。『報恩鈔』の「仏の遺言を信するならば、

専ら法華經を明鏡として、一切經の心をばしるべきか」(昭和定本遺文一一九四頁)の一節に、それをうかがうことができるであろう。宗祖の教判というと、これまでは択一の面が強調されてきたが、これからは同時に、その総合の面にも注目していくべきであろう。こうしたことはこれからの課題であるが、その一例をあげておきたい。

藤井日達師は唱題主義に立ちつつ、実践の中から次の発言をのこしている。

摂受折伏の法門が有るから、摂受の辺からは新仏教徒も摂受せねばならんし、それから色々なヤソ教もユダヤ教も何でもかまわない摂受して、共に其の人の行く最後の道へ導かねばならない。我々も其処へ出ねばならない。それはお題目を唱える一つの事だけれども、それでは何の事か解らない。解る様に話せば世界平和の問題。其処に目標を置くのが現代の仏法。

(『天鼓』昭和六十一年八月号十五頁)

※本稿は第三十九回日蓮宗教学研究発表大会で発表したものに加筆したものである。

引用は昭和定本日蓮聖人遺文・充治園全集による。